

HCTCセミナー

～移植コーディネートにおけるゲノム検査の倫理的課題を考える～

10/26(土)

13:00～15:30

開催報告

開催方法:ハイブリッド開催

(現地対面開催+Zoomを利用したweb live配信)

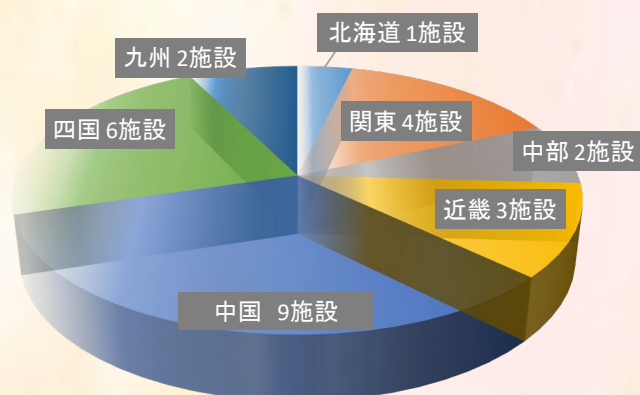
参加者 第1部:22名(現地7名 + web 15名)

第2部:36名(現地9名 + web 27名)

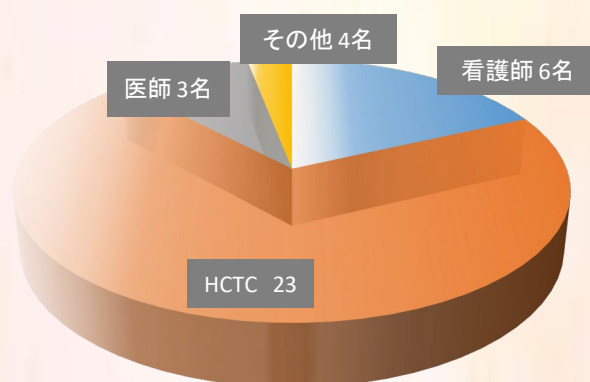
参加施設:施設:27施設

ブロックを越えて多くの方々にご参加いただきました。

【参加施設】



【参加職種】



第1部 事例検討会

遺伝子検査が必要となった血縁ドナーコーディネート

～幹細胞の提供と遺伝子検査について倫理的配慮が必要となった症例～

事例提供 愛媛大学医学部附属病院 認定HCTC 宮田 友紀様
ファシリテーター 札幌北楡病院 認定専門HCTC 山崎 奈美恵様

血液疾患の分野においてもゲノム解析は進歩しており、幹細胞の提供においてドナーの遺伝子検査を必要とする機会も見られています。遺伝子検査を受けることで将来に対する不安を抱える状況に繋がることもあるため、検査を受けるか否かの意思決定は簡単ではありません。故に、支援する際は、SPIKESを意識した介入や患者と医療者が協働して意思決定を行うこと（共同意思決定）が重要であることを学ぶことができました。また、ドナーにとっては家族が病気であるということ、自身がドナー候補者になるということだけでも大きな不安を抱きますが、そこに遺伝子検査も必要な状況になるとその辛さは計り知れないと思います。その辛さを少しでも軽減できるように、HCTCは移植チームで出来ることは何かを常に話合うことが倫理的課題に向き合うことになるということを知ることができ、大変有意義な事例検討会となりました。

第 2 部 講演

ドナー検索に難渋した生殖細胞系変異を伴う骨髓性腫瘍の一例

愛媛県立中央病院 血液内科 諫見 俊宏

兄弟ともにMDSと診断され、遺伝子検査の結果 胚細胞性変異を認めた患者のドナー検索に関する症例についてのお話を伺いました。生殖細胞系変異を伴う疾患の場合は、患者だけではなく、患者のご家族に対しても同じ変異を認める可能性があり、多角的な倫理的配慮が必要となります。

ドナー検索（半合致移植を目的とした血縁ドナー検索）を行う際に難渋した「検査の順序（遺伝子検査とHLA検査）」「遺伝子検査を行う施設検索」「患者と血縁ドナー候補者への倫理的配慮」についてのお話を伺い、遺伝子検査が必要となった際のコーディネート経過についてイメージを持つことができました。

遺伝性疾患と遺伝の基礎 ～腫瘍領域を中心に～

独立行政法人 国立病院機構四国がんセンター

認定遺伝カウンセラー 岡村 弥妃先生

臨床現場において遺伝医療が広がってきており、血液疾患の領域においても遺伝子検査や遺伝カウンセリングを必要とする場が増えています。遺伝子検査は複雑なイメージがあり、患者や家族、ドナー候補者とどう関われば良いのか戸惑いを感じることも多いです。そこで、遺伝の基礎や遺伝カウンセリング、認定遺伝カウンセラーの活動についてお話いただき、HCTCとして遺伝子検査が必要な患者やドナー候補者をどう支援すればよいのか、そのヒントを伺うことができました。遺伝医療が必要となった場合は、まずは遺伝専門職に相談することになりますが、遺伝部門だけでは患者・家族の治療状況や環境、気持ちの変化までを掴むことは難しいとされています。そこでHCTCも含めた多職種で連携体制を作り、情報をしっかりと共有していくことが重要であると学ぶことができました。

事例提供及びファシリテーターを務めていただいたHCTCの皆様、講師を務めていただいた先生方、参加していただいた皆様、ありがとうございました。

次回のセミナーも、ご都合がよろしければご参加いただけますと幸いです。

造血幹細胞移植推進拠点病院
愛媛県立中央病院